学ぼう伝えよう

輝く恵那人 200人目

HUMAN WATCH

長島町正家後田

三枝（みえだ） 聖弥（せいや） さん 23歳

□プロフィル

ラリーで訪れる全国各地の神社や観光地巡りが楽しみ。最近の趣味はサイクリング。全日本ラリー選手権は、８月の秋田、10月の岐阜高山に出場予定。

目標は高くWRC出場

努力は決して裏切らないと信じて

FIA世界ラリー選手権（WRC）出場を目指して、全日本ラリー選手権などの国内大会に参戦を続ける三枝聖弥さん。WRCは、交通が遮断された公道を走破してタイムを競うモータースポーツで、世界各地を転戦する。今年11月には、本市を含む岐阜県と愛知県でWRC日本ラウンド「ラリージャパン2021」が開催される。

三枝さんは父親の影響を受け、高校卒業と同時にモータースポーツを始めた。港でクレーン整備の仕事をしながら、週末は土の路面を走る競技ダートトライアルで腕を磨いていた。そんなある日「うちの会社でラリードライバーにならないか」と誘われた。声を掛けてくれたのは、現役WRCドライバー、勝田貴元選手の祖父で、モータースポーツ事業を展開する会社の勝田照夫会長だった。「ラリーはWRCにつながる。街中や大自然の中をアクセル全開で駆け抜ける競技は他にない。これは行くしかない」と、その魅力にひかれ、1年前に転職した。

しかし、ラリーの世界で結果を出すことは簡単ではなかった。走る路面だけでなく、車両の性能も大きく違った。上位を狙える車両なのに、運転技術が追い付かない。デビュー戦はクラッシュしてリタイア。チームに迷惑を掛け心を痛めた。トップドライバーになるためには実戦経験が必要だが、コロナの影響で出場大会が中止となり、出場機会は減少した。それでも壁を乗り越えようと、厳しく内容の濃い練習に取り組み経験不足を補ってきた。努力は決して裏切らないと信じている。

WRCは雲の上の存在。11月の大会は見る側だが、着実に経験と実績を積み上げ、その距離は縮まっている。目標は「3年以内に国内トップ、5年以内にWRC出場。実現は容易ではないが、高い目標を持ち続けていきたい」と目を輝かせた。世界最高峰のラリー、WRCのスタートラインに立つ日を夢見て、挑戦は続く。

▲大会で使用するラリーカーと三枝聖弥さん